［研究ノート］

ベトナム社会主義のなかのホーチミンと観光実践

大塚　直樹

はじめに

1980 年代後半以降のベトナムでは、ドイモイ路線が提唱され、改革開放政策が実施されてきた。換言すれば、社会主義国家としてのベトナムからベトナム社会主義への道を歩み始めたといえる（古田、1995）。すなわち、普遍的な社会主義理念から、ベトナムという地政学的位置に基づいた「社会主義」の実践への転換とも捉えられる。

改革開放政策は、ベトナム社会主義共和国成立後、制限されていた外国人の訪越を緩やかに簡略化の方向へ導いた。観光は、「外部」からの人の移動の活性化に大きな影響をうける産業である。特に、1990 年代後半は、日本におけるアジアン雑貨のブーム期と一致しており、ベトナム雑貨の「発見」とともにベトナム観光も脚光を浴びていった（鈴木、2009；森、2009）。雑貨の購入は、ベトナム観光の一要素として日本人に受け入れられていった。

また、外国人観光客の増大とともに、「ベトナム革命の表象」であった戦争の記憶にも変化が生じてきた[1)]。すなわち、博物館や資料館での展示や記録、教育のなかで形成されてベトナム戦争の記憶が土産物として物質化するようになる。こうした土産物は、革命の記憶という以上にキッチュな存在として位置づけられる場合が多い。例えば、観光の現場におけるプロパガンダアートがその歴史性を消去され、キッチュな土産物として提示されることがあげられよう。

（写真1）プロパガンダの看板などをモチーフにしたコースター（2014年9月筆者撮影）

ベトナムにおけるキッチュな土産物は、社会主義的なプロパガンダの看板などをモチーフにしたグッズが多い。具体的には、こうした図柄を用いたマグカップやランチョンマット、コースター（写真1）、マウスパッド、マグネット、ステッカー、Tシャツなどがあげられる。また、キッチュな土産物は、2000年代半ばからガイドブックにも登場するようになる。例えば、ホーチミン市に限定してみると、『地球の歩き方』2004-2005年度版に、サイゴン・キッチュという店舗が初めて紹介され、その特徴として、「レインボーカラーの豚のオブジェや、カラフルな鳥かごなどがおしゃれに並ぶ。ほかに社会主義の宣伝ポスターをモチーフにしたランチョンマット･･･」と記載されている。

しかしながら、革命の記憶、言い換えればベトナム社会主義思想の土産物化は、キッチュさだけでは語れない側面をもつ。その一つの事例が故ホーチミンの存在であろう[2)]。ホーチミンは、ベトナムにおいて、今現在も最も尊敬される人物の一人である[3)]。したがって、土産物におけるホーチミングッズの存り様は、キッチュさとは異なる意味合いも帯びていることが想定される。

以上に鑑みて、本論文では、「偉大な」という形容詞とともに呼ばれる政治指導者ホーチミンについて、ホーチミン博物館（ホーチミン市分館）の展示や参観者の実践を通じて、彼がどのように表象されているのか、その特徴を解明し、さらに、ホーチミンというイメージが土産物のなかでどのように表現されているのかを明らかにすることを目的とする。

本稿では、まずホーチミンが死去した後のベトナム社会における同氏の位

置づけを概観する。次に、ホーチミン博物館分館の展示内容を紹介しつつ、公式見解としてホーチミンの位置づけと、現地の参観者の行動からみるホーチミンの存在意義を考察する。最後に、こうしたホーチミンの肖像が観光の現場（土産物売り場）でどのように流用されているのかを明らかにする。なお本稿は、土産物がもつ政治性を明らかにするための予備的考察に位置づけられる[4)]。

1. 指導者としてのホーチミンの特徴

ホーチミンについては、その伝記など多くの研究が蓄積されてきた（eg. 古田、1996；ベトナム労働党史編纂委員会・ベトナム外文書院共編、1966；ベトナム労働党中央党史研究委員会、1970；Brocheux, 2007）。指導者としてのホーチミンという点に注目すると、その特徴としてホーチミンが 1945 年のベトナム民主共和国の独立宣言以後、1969 年に死去するまで、失脚することなく、国家主席の地位を維持し続けたことを指摘しうる。つまり死去するまで、共産党（労働党）と国家の最高指導者として君臨し続け、高い評価を受けてきた。ここから、ホーチミンは「傷のついていない指導者」（古田、1996）とも呼ばれる。

さらに、ホーチミンが死去した 1969 年を、ベトナム史のなかに位置づけてみると、ベトナム戦争のさなか、当該戦争の趨勢を決める一要因となったともいわれるテト攻勢（1968 年）の翌年にあたり、ベトナム社会主義共和国の成立（1976 年）の 7 年前になる。つまり、当然のことではあるが、指導者としてのホーチミンは、テト攻勢というベトナム戦争のターニング・ポイントまでは国家主席として戦争を主導してきたが、直接、建国に関わっていない。したがって、一部の社会主義国の指導者が経験した、革命後の国づくりの段階で受けてきたさまざまな批判をホーチミンは受けることがなかった。事実、1976 年以後のベトナムでは、急進的な社会主義改革やカンボジア侵攻による外国からの援助の停止、自然災害などの複合的な要因によっ

て、国内経済が停滞し、共産党指導者層に対しても批判的な目が向けられた。

しかしながら、後述するように、ホーチミンは「建国の父」と位置づけられることが多い。換言すれば、ホーチミンは、建国には直接的に関与せず、結果として急進的な社会主義改革の実施者として批判の対象にならないのにも関わらず、現存のベトナムという国家の「建国」に対する貢献者として多くの人びとから尊敬のまなざしを向けられている。もちろん、ホーチミンの偉業それ自体が人びとの敬愛の対象となっていることは事実であろう。しかし、死去した時期に大きく影響を受ける「建国の父」という特殊な背景がホーチミンに対して、ネガティブなラベリングがされない理由の一つでもあろう。

2. ホーチミンと革命資料展示

ホーチミン市にあるホーチミン博物館は、首都ハノイにある同博物館の分館である（写真2）。この分館では、1階と2階で展示が行われている[5)]。まず、1階には正面向かって左側に「ホーチミン主席コメモレーション・ルーム」が位置している。ここには、祭壇を模したような台座の上にホーチミン像が設置されている。台座の上にある銅像は、金色でイスに腰掛けている。ホーチミン像の左右には、ろうそく・生け花・果物が供えられている。つまり、写真3をみてもわかるように、コメレーション・ルームに置かれたホーチミン像は、いわば「祀られている」といえよう。事実、多

（写真2）ホーチミン博物館ホーチミン市分館の全景（2014年9月筆者撮影）

くの参観者は、コメモレーション・ルームに入ると、ホーチミン像に対して両手を合わせて拝んでいた[6)]。

（写真 3）コメモレーション・ルームにあるホーチミン像とそれに「参拝」する参観者（2014 年 9 月筆者撮影）

また興味深いことに、参観者は、ホーチミン像を拝んだ後、必ずといってもよいほど自分とホーチミン像と一緒に記念撮影をしていた。確かに、記念碑的な銅像の前で自分と銅像を含めた写真を撮影する行為は一般的であろう。しかし、ほぼすべての参観者にとって、一方で崇拝の対象となり、他方で記念碑的な対象となる銅像は、神仏として神社仏閣や教会等に祀られた対象でない限り、つまり博物館という公共の施設ではあまり多くないのではなかろうか。

また、1 階の入り口を挟んで右隣には、ホーチミンの足跡をたどる展示がされている。ここでは、時代ごとにホーチミンが世界各地を回った様子が示されている。さらに、博物館の入り口を入って奥へ進んだ、左手には「南部に対するホーおじさん（Bac Ho）の思いとホーおじさんに対する南部人民の思い」を主題とした展示室がある。

当該展示は、博物館がホーチミン市に立地している特色をよく表している。すなわち、ホーチミンとベトナム南部の人びとがいかに協働関係を築いてきたのかが示される展示となっている。例えば、南部出身でホーチミンの死後に国家主席となったトンドゥックタンとホーチミンが握手した銅像は、ホーおじさんとベトナム南部との強い絆を示すメタファーになっている（写真 4）。実際、銅像の上部には、ホーチミンのことばとして「私は［ベトナム］南部をいつも心にとめている」（［　］は引用者）と記されている。また、当該ホーチミン像は、サンダル履きの立ち姿である。ここには、一般に質素な生活を好んだといわれるホーチミンの庶民性が表されていると推察さ

（写真4）ホーチミンとトンドゥックタンが握手している銅像（2014年9月筆者撮影）

れる。

博物館2階は、主として、ホーチミンの生涯とベトナム革命の歴史が結びつけられた展示になっている。具体的には、次のような4時期に分けられ、展示室が設けられている。それぞれ、1890年～1920年（第1期）、1920年～1930年（第2期）、1930年～1954年（第3期）、1954年～1969年（第4期）である。

第1期は、ホーチミンが生まれてから青年期を経て、愛国・革命運動を開始した時期であり、マルクス・レーニン主義を受容し、ベトナム革命への道を歩み始めた時期とされ、それに関連した展示がなされている。第2期は、ホーチミンが民族問題・植民地問題に対してマルクス・レーニン主義を創造的に適用し、労働者階級の政党を設立した時期とされる。ここでは、1930年にホーチミンによって設立されたベトナム共産党という用語が使用されず、「ベトナム労働者階級の政党（Dang cua giai cap cong nhan Viet Nam）」と表現されている。

第3期は、ホーチミンが八月革命を主導し、それを成功に導き、ベトナム民主共和国を建国した時期、さらにフランス植民地主義者の侵略に対して勝利した時期とされている。最後に、第4期は、ホーチミンが北部における社会主義革命を指導し、アメリカの侵略に対して戦い、南部解放・祖国統一に至った時期としている。周知のように、南部解放・祖国統一は、それぞれ1975年と1976年の出来事である。前述のように、1969年に死去したホーチミンは、祖国統一から建国へのプロセスに直接的に関与していない。しかし、博物館では、あくまで「建国の父」としてホーチミンを描くために、第4期の展示のなかで上記のような表現を用いていると推察できる。ここから

現存のベトナムという国家は、ホーチミンが創り出した理念に基づいていること、したがって、それを堅持しなければならないという言説が生み出されていることがみてとれる。

また、各展示室入り口の解説のなかで、ホーおじさん（Bac Ho）とホーチミン主席（Chu tich Ho Chi Minh）という使い分けが行われていることも興味深い。1 階のベトナム南部とホーチミンとの絆を示す展示では、ホーおじさんが使用され、その他の部分では主としてホーチミン主席が使用されている。ここには、展示のなかに、庶民的な性格としてのホーおじさんと指導者としてのホーチミンの両義性が表されているといっても過言ではないだろう。

さらに、博物館内に展示されたホーチミンの写真や肖像画は、晩年かつ穏和な表情をしているものが多い。もちろん、ホーチミンの足跡をたどるコーナーでは、時代ごとに青年期の写真や肖像画が用いられている。しかし、ホーチミンという人物を表象する場面では、笑みを浮かべた表情が採用されている。こうした展示方法からは、中国における老師のイメージが連想される。つまり、偉大な指導者として敬うべき存在であっても、堅苦しくないイメージ、言い換えれば厳格な軍事指導者ではない点を演出しているのであろう。

（写真 5）博物館 2 階に展示されたホーチミン像と手をつなぎ記念撮影する参観者（2014 年 9 月筆者撮影）

こうした展示に対する参観者の行動のうち、注目される点として、2 階の展示室に置かれたホーチミン像との距離感である。具体的には、参観者がホーチミンの銅像と手をつなぎ、写真撮影をする姿が散見され、親近感を持っている様子がうかがわれた（写真 5）。

以上から、博物館では、その展示におい

てホーおじさんとホーチミン主席ということばを併用することを通じて、人民に卑近な存在として、かつ偉大な指導者としてのホーチミンを表象しようと試みていると捉えうる。これに対して参観者は、一方で、コメモレーション・ルームのホーチミン像へ「参拝」することで同氏の神聖性を確認し、他方で、別のホーチミン像と手をつないで記念撮影をする行為などを通じて、生前のホーおじさんへの親近感を追体験していることがわかる。

3. ホーチミン主席／ホーおじさんと土産物

土産物としてのホーチミングッズといえば、まずTシャツや絵はがきが想像される。特にホーチミンの肖像画を描いたTシャツは、ホーチミン市内の土産物屋で頻繁に見かけるグッズといえる。ホーチミンTシャツは、露店や社会主義をキッチュ化した品を扱う店舗で販売されている。露店では、iPhoneとベトナムのフォー（Pho）という麺料理を語呂合わせした、iPhoというTシャツやゲバラの肖像がプリントされたTシャツなどと併置されている。

ここで興味深い点として、第1に、ホーチミンTシャツの肖像は、ホーチミン博物館の典型的な肖像と同じように、晩年の柔らかい表情が使用されていることがあげられる。背景としては、Tシャツという日用品を通じて、単なる歴史上の著名な指導者というよりは庶民感覚をもったホーおじさんのイメージを浸透させようという意図の表れとも考えうる。

第2に、ゲバラTシャツは、帽子などの特徴的な輪郭を残し、その顔を猿に入れ替えた商品が出回っているのに対して、ホーチミンTシャツでは、そうした「加工」がなされない。確かに、社会主義をキッチュ化した品を扱う土産物屋では、ホーチミンTシャツの肖像に少しぼかしを入れたようなデザインが存在する。しかし、管見ながら、ホーチミンTシャツの顔の表情を他の肖像などに入れ替え、流用したような商品は見かけたことがない。つまり、土産物としてホーチミンのイメージを使用する際に、越えてはい

けない境界線が存在していると捉えうる[7]。具体的には、指導者ホーチミン主席のカリスマ性およびそこから派生する神聖性を侵すことはできないのであろう。実際、ホーチミン市内の店頭では、国家主席ホーチミンをオーソドックスに示した額縁入り肖像画も販売されている（写真 6）[8]。

しかしながら、視点をかえると、ホーチミンのイメージは、境界線を越えない限りにおいてキッチュな社会主義の土産物の要素として位置づけることができる。例えば、ホーチミンの肖像が描かれたマグネット・絵はがきなどは、他の社会主義のキッチュな土産物と併置されている。また、ホーチミンのポートレートは、キッチュ化したプロパガンダアートの一部として店頭に飾られる（写真 7）。さらに、ホーチミンの肖像画入りの卓上カレンダーは、日本のアニメを模したカレンダーと一緒に店頭に並べられる（写真 8）。

以上から、土産物を通じてみ

（写真 6）店頭に並ぶホーチミン主席の肖像画が入った額縁（2014 年 9 月筆者撮影）

（写真 7）土産物としてのプロパガンダアートと併置されるホーチミンのポートレート（2014 年 9 月筆者撮影）

（写真 8）日本のアニメを模したカレンダーと並べて販売されているホーチミンの肖像入り卓上カレンダー（2014 年 9 月筆者撮影）

たホーチミンは、庶民感覚をもったホーおじさんと不可侵の存在であるホーチミン主席のイメージが混交していると捉えることができる。

むすびにかえて

この小稿では、故ホーチミンについて、博物館の展示や参観者の実践を通じて、彼がどのように表象されているのかを解明し、そのホーチミンというイメージが土産物のなかでどのように表現されているのかを明らかにすることを目的とした。

結果として、以下の4点を指摘できる。第1に、ホーチミンが「建国」の父として、積極的に評価されている点があげられる。もちろん、ホーチミンの活動それ自体が歴史的にみて偉業であることは看過できない。しかし、「傷のついていない指導者」と評されるホーチミンのイメージは、国づくりに直接的に参画していないにもかからず、「建国」の立役者とされている点に一つの特徴を見いだせよう。したがって、ホーチミンは、統一後、国づくりの時期にみられた共産党の指導者層に対する否定的な反応とは無関係な存在として人びとに許容されうる。

第2に、ホーチミン博物館における展示は、そうした特徴を巧みに反映させていることがあげられる。展示では、「建国」の父であるホーチミンが一方で偉大な指導者として、革命にいかに貢献したのかをベトナム近現代史のなかに位置づけて提示している。他方では、「建国」の父としての別側面をホーおじさんという表現を用いることで庶民感覚をもった人物として表象している。

第3に、博物館における参観者の実践には、二重性がみられることがあげられる。すなわち、ホーチミン像への「参拝」や像との記念撮影という行為を通じて、ホーチミン主席の崇高性とホーおじさんの親しみやすさを同時に体感しているように見受けられた。特に、参観者がホーチミンの銅像と手をつなぎ記念撮影をする姿には、ホーチミンへの親近感が顕在化していると捉

えうる。

最後に、ホーチミンのイメージは、こうした偉大さ、さらに言えばそこから派生する神聖性、および庶民性が選択的に使い分けられ土産物化していることがあげられる。実際、偉大な存在そのものが土産物に表現されることもあれば、庶民感覚をもったホーおじさんのイメージがプロパガンダアートなどを通じてキッチュな土産物に転化することもある。つまり、土産物のなかのホーチミンは、ベトナム社会主義のキッチュさと「真正性」の両面をあわせもつ一つの記号として位置づけられるといえよう。

註

1）もちろんベトナム戦争の記憶の変化は、観光産業の拡張による外国人の流入という「外部」からの影響のみに帰することはできない。例えば、今井（2014）は、ベトナムにおける戦争の記憶について、民間によって設立された博物館を事例にあげつつ、共産党が提示してきた公式的な記憶が国家の占有状態を脱し、「社会化」、つまり民間化しつつあることを指摘している。

2）以下本稿では、都市名を指す場合にはホーチミン市と表記し、ホーチミンとした場合には人物を示すこととする。

3）ドイモイ政策以後、1990 年初頭からベトナム共産党の文書のなかに「ホーチミン思想」という用語が登場し、ホーチミンに対してさらに注目が集まった。ホーチミン思想とは、マルクス・レーニン主義を、ベトナム民族の伝統的な価値のなかで創造的に適応・発展させたものとされている（DCSVN, 2001）。ここには、改革開放政策以降のベトナム社会主義的な思想が読み取れる。

4）本稿で使用した現地情報は、主として、2014 年 8 月 27 日～ 9 月 9 日に実施した調査に基づいている。なお、調査にあたっては、共同研究者として、亜細亜大学平成 26 年度特別研究助成「社会主義国における観光土産に関する研究：中国とベトナムの比較から」（研究代表者：高山陽子）の補助を受けた。

5）ホーチミン博物館ホーチミン市分館には、3 階部分も存在するが、常設展示は行われていない。なお、入館料は 2014 年 9 月現在で 10,000 ドンである。

6）極端な例かもしれないが、ホーチミン像の前に正座をして「お参り」をしようとした参観者もいた。しかし、こうした行為は、博物館職員に制止されていた。

7）もちろん、ホーチミンの肖像を使用する際、その肖像権についてどのような

法律的制約があるかも検討する必要があろう。この点は今後の課題としたい。

8）かつて筆者は、長期滞在から日本へ帰国する際に、現地の知人から土産物としてこの肖像画をもらった経験がある。

引用文献

今井昭夫「ベトナムにおける戦争の記憶の「社会化」――「捕虜となった革命戦士博物館」の事例を通して」『地域研究』Vol.14-2、2014年、112-125ページ。

鈴木涼太郎「「ベトナム雑貨観光」の成立をめぐる一考察――モノの移動からみる観光試論」『立教大学観光学部紀要』Vol.11、2009年、122-129ページ。

古田元夫『ベトナムの世界史――中華世界から東南アジア世界へ』岩波書店、1995年。

古田元夫『ホー・チ・ミン――民族解放とドイモイ』岩波書店、1996年。

ベトナム労働党史編纂委員会・ベトナム外文書院共編『ホー・チ・ミン――人とその時代委』原大三郎・太田勝洪共訳、東邦出版、1966年。

ベトナム労働党中央党史研究委員会『正伝　ホー・チ・ミン』真保潤一郎訳、毎日新聞社、1970年。

森正人「リゾートと自宅のアジア的なるもの」神田孝治編著『観光の空間――視点とアプローチ』ナカニシヤ出版、2009年、176-187ページ。

Brocheux, Pierre, *Ho Chi Minh: A Biography*, Translated by Claire Duiker, Cambridge University Press; New York, 2007[2003].

Dang Cong san Viet Nam, *Van kien Dai hoi dai bieu toan quoc lan thu IX*, Nxb. Chinh tri qouc gia; Ha Noi, 2001.